

# 論文内容要旨

論文題目

「山形市胃がん検診における血清学的リスク分類  
(ABC分類)導入の成果と問題点に関する検討」

責任講座： 内科学第二 講座

氏名： 吉澤 和哉

【内容要旨】 (1,200字以内)

【背景・目的】効率的に胃癌リスクを集約する方法として *Helicobacter pylori*(Hp)抗体とペプシノゲン(PG)法を組み合わせる胃粘膜萎縮を評価する ABC 分類の有用性が報告されているが、一般住民検診での検証は少ない。また、胃粘膜萎縮を有する例が、実際には胃癌リスクが低いとされる A 群に誤分類される問題(偽 A 群)が報告されているが、その実態は不明である。そこで、山形市一般住民検診で ABC 分類を導入した成績と課題について検討した。

【方法】[1]2010年6月～2011年12月に胃 X 線検診と ABC 分類を行ない、PG法が不適な例を除いた連続3517名(男性1481名、平均62.7±8.8歳)を対象とした。既報に基づき血清 Hp 抗体(基準値10 U/ml未満)、PG法(PG I 70 ng/ml以下かつ PG I/II 比3.0以下でPG法陽性)を用いて A、B、C、D群に分類した。B、C、D群及び胃 X 線検診での要精査群に対し内視鏡検査を勧奨した。

[2]採血結果を伏せて胃 X 線検査の胃小区と皺襞を読影し、胃粘膜萎縮の評価を行った。

【結果】[1]A群42%、B群17%、C群33%、D群8%であった。B、C、D群から計21例の胃癌が発見され、そのうちの約7割は X 線画像では異常が指摘されておらず、ABC分類を契機に発見に至った例であった。[2]X線画像の読影の結果、萎縮がない胃小区は全体の35%、萎縮がある胃小区は34%、判断困難な胃小区は1%であった。また萎縮がない皺襞は全体の29%で、萎縮のある皺襞は71%であった。A群のうち37%が X 線画像上、胃粘膜萎縮またはその疑いがある胃小区や皺襞の所見を示していた。

【結論】山形市の胃がん検診において ABC 分類の有用性が示された。しかし、ABC分類と、胃 X 線画像の胃粘膜萎縮の評価は完全には一致せず、一度は画像検査で萎縮の評価を行うべきと考えられた。

平成 26年 1月 17日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

## 学位論文審査結果報告書

申請者氏名：吉澤 和哉

論文題目：山形市胃がん検診における血清学的リスク分類（ABC分類）導入の成果と問題点に関する検討

審査委員：主審査委員

飯野光吾 

副審査委員

細矢貴亮 

副審査委員

北中千史 

審査終了日：平成26年 1月 17日

### 【論文審査結果要旨】

本研究は、効率的に胃癌リスクを集約する方法として Helicobacter pylori (Hp) 抗体とペプシノゲン(PG)法を組み合わせる胃粘膜萎縮を評価する ABC 法の一般住民健診での有効性を検討すること、および ABC 法において胃癌発生リスクが極めて低いと考えられている A 群中、胃粘膜萎縮を有するいわゆる偽 A 群の実態を明らかにすることを目的として行われた。

対象は2010年6月から2011年12月に胃X線検査とABC分類を行なった山形市民3517名である。既報のごとく、Hp抗体、PG法を用いてA、B、C、D群の4群に分類し、B、C、D群および胃X線検査で要精査となった症例に対して胃粘膜精査の目的で内視鏡検査を施行した。さらに、日本消化器病学会専門医2名が、ABC分類とは独立して胃X線画像所見より胃粘膜萎縮の評価し、A群の胃粘膜萎縮の有無を検討したことが本研究の特色と言える。

ABC分類、X線および内視鏡検査の結果では、A群が約40%を占め最も多く、以下、C群、B群、D群の順であった。内視鏡検査でB、C、D群から計21名の胃癌が発見されたが、この21名中15名はX線画像では異常が指摘されていなかった症例であった。A群のX線画像の結果では、40%弱が胃粘膜萎縮またはその疑いがある胃小区や皺襞の所見を示していた。

以上は、一般住民健診における胃がん検診での胃X線検査へのABC分類の併用の有用性を示すとともに、A群においても一度はX線検査により粘膜萎縮の評価が必要なことを示唆する貴重な結果と考えられた。

審査結果として、本研究の内容は単年度の検討でありA、B、C、D各群からの長期的な胃癌発生頻度が不明であることなどの今後のさらなる検討が必要な部分もあるが、対象が山形大学医学部GCOEプログラムで十分な追跡調査が可能であること、3500名を超える一般住民を対象としたこれまでにない大規模な調査で、今後の胃がん検診ストラテジーにも影響を与えうる研究であると考えられることなどから、充分学位に値すると判定した。